



「常識的に考えて」

【問題】

「タカシの部屋に空き巣が侵入した。容疑者は、彼の妻であるリョウコとリョウコの友達のマリ、ヨシミの三者。状況は以下の通り。

1. 犯行時刻にアリバイがあるのはリョウコのみ。
 2. マリはタカシの子どもを妊娠している。
 3. タカシの部屋の構造上、女単独の犯行は不可能である。
 4. ヨシミとマリは仲違いしており、力を合わせて犯行に及ぶことはない。
- さて、犯行に及んだのは誰か。」

答えはヨシミである。単純な論理学の問題であるが、「リョウコ、マリ、ヨシミ」という名前の並びからヨシミを女であると誤認してしまうと答えが遠のく。あなたはこの罠にひっかからなかっただろうか。

この問題のように、推理小説などでは情報の一部を欠落させて誤った方向に読者を誘導して欺く手法が存在し、叙述トリックと呼ばれている。特に、性別や年齢、関係性など人物の属性を誤認させるケースが多い。これは犯人探しという推理小説の目的に効果的であることに加え、人間は自らの常識に依存して人物の属性を判断しがちであるためだと言われている。

—昨年世間を騒がせたナスダック元会長による

巨額詐欺事件も人物属性の誤認が背景にある。『常識的に考えて』あのような人物が詐欺を働くとは思わなかった、という声が大半であった。たしかに高い地位にいる（いた）人間は信頼に足り、詐欺などは働かないと考えることは常識かもしれない。

人間は『常識的に考えて』物事を判断することで人工知能が直面するフレーム問題をいとも簡単に解決する。この賢い思考の裏には、「自分が培った経験や文化背景からは、そうである確率が高いと思

われる」というベイジアンな確率論が潜んでいる。先の巨額詐欺事件という事前情報を得た今、高い地位の人間が詐欺など働かないと判断する確率は以前より下がっただろう。しかし、リスク管理という観点で大切なのはこういった事前情報がない場合でも常に「そうである確率が高いが、低い確率でそうではないこともある」という思考を忘れないことであろう。

ここで、冒頭の問題に戻って、解答として以下の文章をつけくわえてみよう。

「部屋から盗まれたタカシの大好物であるかつお節は、ヨシミの小屋の中から見つかった。」

さて、タカシたちが人間である確率は『常識的に考えて』どれほど変わりましたか。（中田 貴之）

